いしかれんだより

第13・14号
1995.2

石川県精神障害者
家族会連合会
〒920 金沢市南新保町ル3番1号
石川県精神保健センター内
TEL (0762) 38－5761
FAX (0762) 38－5762

最近の家族会の流れから

石川県精神障害者家族会連合会
会長　林　　久　夫

私が、石家連の会長に就任してから早2期目を終わろうとしています。これ一重に県下の単位家族会の格別の御尽力と御理解の賜物と深く感謝しています。

この1年のあいだに精神保健法の改正に加えて障害者基本法が成立し、精神障害者の他の障害者と同じく福祉の対象として法的に認められるようになりました。私たち家族の長年にわたる活動が実り、ようやく精神障害者にも光があたりはじめたのです。

精神障害者の「暮らしの場」の問題は全国各地で作業所をはじめ福祉ホームやグループホームの整備や地域ネットワーク作りなど多面的に取り組まれ展開されていますが、もう一歩すすめるためには他の障害者と共に地域の人々とも互いにふれあいの心を持ちたいと思います。

全家連ニュースの主なものをお知らせします。先ず「厚生省、障害者保健福祉施策推進本部設置」です。本部長が事務次官です。これはノーマライゼーションの理念の下で地域における障害者の生活を支えるための施策の充実、ライフステージを通じた総合的な障害者施策の展開、障害者の種別を超えた横断的・総合的なサービス提供、体制の整備等、障害者対策をめぐる諸課題に対応した効果的な施策の推進が求められています。このため身体障害、精神薄弱及び精神障害の各分野にわたる障害者保健福祉施策推進本部を設置することとなったものです。

次に厚生省が来年度精神保健法の改正を予定していることです。医療費の公費負担の見直し、精神障害者手帳の導入などが主な柱ですが、厚生省から全家連としての意見が求められており細部に関して検討中とのことです。

石家連の家族会活動についてお知らせします。平成6年度までに小規模作業所が8ヶ所設立されました。又グループホームも4ヶ所開所しました。平成7年には加賀地区に援産施設と援護寮の社会復帰施設が設立されるとのことです。小規模作業所は平成7年度に県下の未開設だった地区、七尾市、松任市、輪島市、能都町、珠洲市に開所されるとの事です。単位家族会の絶大なる力の結集だと私は信じています。

今後とも会員が力を合せて陳情活動を県内の市町村に拡げ、自治体に障害者施策の改善向上する活動を更に強く展開するとともに精神保健の事業を計画実施する様、努力すべきだと思います。

精神障害者家族会と病院長との懇談会

去る平成6年11月2日(水)、県連と石川県精神保健協会が主催して、毎年恒例の精神障害者家族会と病院長との懇談会が開かれました。今回はじめて分科会をとり入れたこともあって例年より多い100人近くの人の参加がありました。分科会の司会を担当した3人の県連副会長に感想を書いてもらいました。

1．病気・療養に関する分科会

心明会　会長　宮　井　　巽

会場からは「働きに行っても長続きしない」、「働きには行くが病気のことが知れると本人が嫌がって辞めてしまう」、「金銭感覚が乏しく衝動的に浪費して多額の借金ができ困っている」など私達の知らない発言があり、問題の多様さと家族の悩みの深さにびっくりしました。分科会のなかでは適切な言葉が出し得ず、専門家の人達に意見を求めたり、課題として残してしまったことを残念に思っています。

私事になりますが、昨年暮に一寸とした不注意により骨折し、現在入院しています。私は2～3ヶ月で退院できますが、精神障害者の人達は病気で社会生活を失い、退院しても服薬を続けなければならないことなど、自分の身が不自由になってよけい、言葉であらわしようもない胸の痛みを覚えています。

私達親が「あれは駄目」、「なまくら」など、社会の目を気遣いながら、彼らが回復途上ということを忘れ、親という権利のみの無理解な親ではなかったかと思います。彼らとともに一緒になってまわりの人々に理解を求め、強い家族会の一員になりたいと考えています。

2．家族会活動に関する分科会

元町会　会長　梅　田　克　広

今年は分科会方式を採り入れ出来るだけ多くの会員の意見を聞くことにした。

1．病院の中にも家族会があると思うが、未だない病院には、家族会を作っていただき、地域家族会と交流をもつ事が出来ないか。あるいは、地域家族会の存在を知らせて欲しい。

2．医療側の方に患者、家族に充分な治療方針を説明して欲しい。

3．家族教室は保健所で実施されているが、病院側にも家族教室を作り、病気に対する知識や障害に対する理解を深めるよう指導して欲しい。

などの意見が出された。

司会者より9月2日に行われた「北信越ブロック研修会」で、新潟県精神保健センター所長の後藤雅博先生の講演「精神障害者の社会復帰と家族の役割」の中で、「家族の役割」は、共同治療者として、…「患者＋家族＋専門家。ユーザー（消費者）として」…知識、情報の要求。家族会活動は…社会的リハビリテーション活動である。援助者としては…援助者が共倒れにならないようにと言われた事などを紹介し、話し合いの結果当分科会では、下記事項を要望する事にした。

要望事項

病気・薬などの基本的な知識、情報が得られように病院には、是非家族教室を作って欲しい。

3．作業所・住居等社会復帰に関する分科会

くろゆり会　会長　西　出　外　次

結果はどうであろうと、新しい歴史を作っていくためにはたえず家族会員のコンタクトを充分にとっていかないと決して良い結果は得られません。今回分科会方式を採用してみたのも、多少のトラブルはありましたが、一応大きな成果と言って良いのではないでしょうか。各地区の会長の努力もあったと思いますが、予想以上に参加者が多かったことに、地区の皆様に改めて御礼申し上げます。

さて、分科会の内容を１～２紹介しますと、(1)自宅療養中急に病気が急変し、入院が必要な場合病室が空いているか。(2)作業所紹介後の病院との連携をどうするのか。(3)病院から作業所を紹介する時の主治医の基準は何か。(4)身寄りのない人のため、もっと多くの病院がグループホームを作れないか。など切実な発言もありました。もっと時間があればと思うほどたくさんの意見が出されました。

私達障害者を持つ親として、安心して死んでいける時代が少しずつ見えてきました。21世紀まであとわずかです。会員の皆さん元気でがんばりましょう。

こころの健康フェスタに参加して

泉の家　指導員　三　谷　昭　子

こころの健康フェスタには実行委員として参加しました。企画時での話し合い、当日の緊張感、終了後の満足感などとても貴重な経験となりました。主催の県、センターの方々に深く感謝しております。

さて、11月５日当日は、会場前から沢山の人が見えました。泉の家では、作品の販売をしたのですが、人だかりができ、対応に追われ、今までで一番の売れゆきでした。一般市民（特に女性）のエネルギーが伝わってきた日でもありました。メンバーの人達にも、大変励みになり、毎年、このようなフェスタがあれば良いとの声もあがっていました。

フェスタの中で、一番印象深かったのは講演でした。大江健三郎先生のお話は興味深く、聴くことができました。病気から回復する時、心も恢復する、高揚する、開放される。病気という苦しい経験をすることにより、成長するといったお話だったと思います。不幸にして、精神の病気に患った人も、見守る家族も病気そのものの苦痛、偏見、無理解などの苦しい経験をし、それらを乗り越えようとしていく時、人間として成長していくのではないでしょうか。魅力的なメンバーが多いのもそのためでしょうか。私自身は、病気をした事がなく、それが自慢の１つなのですが、逆に人の痛みがわからない未熟な人間に思えて負い目に感じる時があります。これらの事を改めて考えさせられた講演でした。

最後に、フェスタの目的（心の健康に対する関心を深める、精神障害者に対する理解を広める）がどれ位、達成できたのかはわかりませんが、作業所の存在をわかって下さった方もいて、うれしく思いました。これからも少しずつでも確実に目的を達成していければ良いのではないでしょうか。そして、それに関わることができれば、私にとっても、とても幸いなことだと思っています。

第27回全国精神障害者家族大会（神戸大会）に参加して

金沢市域精神障害者家族会連合
梅　田　克　広

今回は金沢市にあるすべての家族会から参加されました。参加された方の中には、親子での方、ご夫婦の方など14名と今までにない人数になりました。参加された方々は何か得るところがあった事と思っています。

大会では各分科会に別れて討議がなされましたが、私は第２分科会の「地域における作業所の役割」の方に参加しました。分科会では、４作業所より夫々設立後10年の経過、受け皿としてのネットワーク、活動の特徴などの報告がされ、話題が提供されました。

私は金沢市域連合と云う立場で、前年「石家連」で行われた枚方市における家族会活動状況の視察及び石川県内、金沢市内の各作業所の活動状況を重ね合わせてみると「病院から地域」へと云う流れのなかで、各先発作業所が行ってきた「地域が支える組織作り」が、今後の金沢市域家族会、作業所の大きな課題であり、その方向に努力したいと思っています。地域住民の理解、協力を得るには、何をなすべきか。地域住民が心配するのは何か。これらの事はすでに諸先生、先輩の方々から、指摘されているとおりで、後は具体的にどう行動するかだけだと思います。以上が本大会に参加し、第２分科をとおしての感想です。

全国大会に参加して

鳴和の里　指導員　花　岡　恭　子

参加家族の多い事に驚きを感じました。

分科会の内容では、地域的な活動のあり方、作業所のあり方、行政との関わり、等色々な方面で問題が多々ある様に感じました。

講演会を聞いて思った事は、どんな問題に対しても当事者自身が、誰に頼る事なく積極的に表面に出て活動する事が一番大切な事だと言う事を感じ取りました。両親、兄弟（姉妹）がいなくなり、自分一人になった時、どの様に世間に対応して行けば良いか、又生活面はどうすれば良いか、これからの人生をどの様に送れば良いか、等、当事者同士て話し合う事、相談出来る仲間を多く得る事に努力して行く事が一番の課題だと思いました。

石家連作業所部会から

１．「作業所部会の活動報告」

事務局　中　田　なみ子

作業所部会の活動も３年目に入り、当初県内７ケ所だった作業所も今年度より小松市の「ワークハウスつばさ」を入れて８ケ所が加入するようになりました。

今年度の活動の中心となったのは一昨年11月に県内の作業所を利用する家族の方を対象としたアンケート調査のまとめでした。集計まとめの検討、関係機関への発送と１年近くかかりました。それぞれが指導員としての仕事をこなしながらの集計作業となるため計画よりずいぶん長くかかってしまいました。作業所部会としてアンケートに取り組んだのはこれで２回目ですが、アンケート調査のむずかしさを痛感した年だったように思います。

次に２回目となった県外研修の取り組みです。どの施設へ、どんな目的を持って研修に行くか、部会で集まり話し合って決めていきました。自分たちの研修を有意義なものにするための努力をかさねて、かねてから希望の多かった埼玉県大宮市の「やどかりの里」へ研修に行きました。

最後に部会全体と取り組みではありませんが、部会長であるくろゆり作業所所長西出外次さんが能登地区で３回にわたって作業所作りのこと、部会の紹介等の講演に出むかれました。作業所作りの気運が高まっている能登地区に少しですが部会として援助できたのではないかと思います。

年度当初にたてた事業の２つの柱「経理事務の勉強」と「事例検討」は来年度へ持ち越すことになりそうです。来年度は新たに何ケ所かの作業所も加わり、ますますにぎやかな作業所部会になることと思います。

2.「作業所通所者家族アンケート」結果報告について

石家連作業所部会

今回アンケートは県内の7つの作業所に通所するメンバーの家族を対象に、平成5年度に実施したものです。対象者107人中89人の方が答えて下さり、回収率83.2%でした。その結果を簡単に報告します。

［記入者について］

アンケートに答えてくれた人は誰か、という設問で、全体の87.6%が親で（その中でも母親の占める割合が高い）、年齢では60才以上が60.7%であった。

住居形態としては、家族と同居が76.4%であった。

［通所者について］

- 家庭内での生活の様子について

  お金のやりくり、買い物等7～8割が自分ででき、受診・服薬も9割が自分でしている。家事については洗濯、自室の掃除が約5～6割、食事の支度は約3割、後かたづけは約5割が自分でしている。

  交通機関は約8割が一人で利用でき、家の手伝いは5割がしている。

- 通所者の85.4%は多少にかかわらず、作業所のことを家で話題にしている。

  「作業所について何といっているか」との設問に対しては肯定的なものが多く、①行き場ができた②友達ができた③生活にリズムができたが上位3つで「こづかいを稼げる」は6位。逆に「工賃が安すぎる」は9位であった。

- 病気の相談相手は医師46.1%、家族40.4%で半数以上を占めた。

・病気のこと以外で通所者に対し気にかかっていることは、将来のことが最も多く76.4%、次いで経済的なこと31.5%、仕事のこと30.3%であった。

- 障害年金については83.1%が知っており、そのうち63.5%が受給していた。

［作業所について］

- 作業所について知ったのは病院、保健所が圧倒的に多く、通所を決めたのは約半数が本人であった。
- 作業所の開所時間については、丁度よいが78.7%、短いが12.4%、長いが3.4%であった。
- 作業内容を知っている人は82.0%、工賃の額を知っている人は68.4%で、その中で工賃が安いと思っている人は57.4%であった。
- 作業所の開所日数の希望は、1週間に5日というのが最も多く、次いで6日、4日の順であった。
- 通所し始めてからの期間では6～9ヶ月未満が18.0%で最も多く、次いで3年以上が16.9%、3ヶ月未満が14.6%であった。
- 作業所へは週5日以上通っている人が51.6%であり、通所方法としては自家用車、バス、徒歩が各20%位であった。

公共交通機関を利用していると回答のあった28人の方の1ヶ月の交通費の負担は5,000円未満は3人、5,000～10,000円未満は12人、10,000円以上は13人であった。

- 通所者が作業所に通うようになって変化があったと答えた人は76.4%、家族自身に変化があったと答えた人は68.5%であった。
- 作業所の運営については80.9%が関心を持っているが、協力できると答えた人は19.1%と少なかった。ただ、「協力できないのではなくて、できることがあれば協力したい」という意見もあった。
- 指導員に対しては、本人の相談相手になってほしいという注文が56.1%と多かった。

最後になりましたが、今回のアンケートに御協力いただきました御家族の方に対し厚く御礼申し上げます。この結果を各々の作業所運営に生かし、また作業所部会としての活動も続けていく所存ですので、今後とも御支援、御協力の程よろしくお願いいたします。

3．「やどかりの里」視察に参加して

のぞみ作業所　指導員　堀　　牧　子

作業所の指導員となってから、今まで色々な研修に参加しているうちに、やはり本や講演だけでなく、１度は行ってみたいと思っていたのがやどかりの里でした。それは生活支援センターやグループホーム、作業所がどう運営されているのか、この目で見たいということもありましたが、それ以上にそこにたずさわっている職員の関わりや、利用しているメンバーがどんな思いでいるのかということに強く関心があったからです。ともすれば私達は指導員とメンバーという関係の中で、管理的・保護的な立場に立ってしまいがちになる危険性を強く感じ、改めて日常から離れ自分の関わりを振り返ってみたいと思ったのです。研修を通じて感じたことはまず、環境を整える事。(生活のしずらさがあれば、それに変わるものがあり、自分で選べる。その人がありのままに生きれる様に周りを整える事)次にメンバーが自分自身の為に自らの力を発揮して必要な利用施設を作っていく事。そして職員はその様なメンバーの力が出せる場を保障していく関わりが必要だという事です。

今後もこの作業所部会という場を有効に活用し、各々の作業所での課題をきちんととらえ、私達指導員の質をお互いに高めていきたいと思います。

最後に、１泊２日という短いスケジュールでしたが、次回は是非、実際にやどかりの里へ泊り、もう少し職員やメンバーと懇談する時間を持てればと思いました。

くろゆり作業所　指導員　藤　井　優　代

やどかりの里ってどんな所だろう？期待に胸を膨ませての研修でした。やどかりの里を紹介して頂く中で“その人がその人のままで地域で生活できる様に支援することがこの里の目的である”の言葉がずっしりと響いてきました。こんな、当然のことができない現状に於て、この目的は私も理想と思い描くことです。そして支援センターを自分の目と足で歩いてみてこの里が地域の中に、なんて自然にあるのだろうと感動しました。又、ボランティアの方々が、皆それぞれに楽しみながら意識をもってごく自然に出入りされています。これこそノーマライゼーションを踏み出していると感じました。又、下駄履き的にいろいろな必要とするものがあり、その選択も自由です。私もたとえ、歩みは遅くとも地域とのネットワーク作りをはかりながら、ノーマライゼーションにむけて一歩づつ歩んでいきたいと思いました。

ひまわり共同作業所　指導員　渡　瀬　伸　江

私が一番心に残ったのは、やはり家族会の志村さんのお話でした。志村さんのことはすこし本で読ませていただきましたが、やはり直接耳で聞いた話には苦労と頑張りがしみじみ伝わってきました。親は子を想う心はみな同じ、可愛いからこそ、なんとか社会復帰をしてもらいたいと願わずにはいられない。

恥も何もかも捨てて街頭募金をしたりしてこの世の中に病気のことをわかってもらう為心を開いていく志村さんの想いに感動しました。「都会だから田舎だから」ということではないと思いました。同じ人間に問いかけ話かけていくのだから……。

やどかりの里の家族会、スタッフ、ボランティアの方々の心が一つになって、当事者の方々を支える思い、私達もできないはずはないかとすこし自信が湧いてきました。

すみれ作業所　指導員　坂　本　時　子

「やどかりの里」を実際に目にした時、話しだけでは分かりにくかった点が理解出来た様に思います。24時間体制で機能している生活支援センターはメンバーの駆け込み寺であり、憩いの場であり又、日常生活をメンバー同志お互いに助け合って生活する場所でもありました。この場所を中心として、近くの住宅地にグループホームやリサイクルセンター、喫茶店、作業所等が点在しておりメンバーは力が付くに従って自分に合った場所と職場を選択出来る事がとても羨ましく思いました。何よりも25年間という長い積み重ねがあればこそで、１年や２年のまだやっと歩き始めた作業所にとってはこれからの課題で、貴重な指針を教えて頂いたおもいです。

鳴和の里　指導員　広　瀬　千恵子

大宮市で６畳と４畳半のお茶の間から始まったやどかりの里が、鉄筋コンクリート３階建てになった25年間の道程はとても大変な事でした。気の遠くなるような資金集めは、会員、家族、後援会、そしてメンバー自身の街頭募金が新聞で取り上げられ、その「やる気」が市民の心を打ち動かして多額の寄付金が寄せられた話などを聞き感動しました。

私達の作業所では毎日17名程のメンバーが通所していますが、昼間の行き場所的な作業所だと思います。生活の足しになる程の賃金も出ませんが、家に閉じこもっていたメンバー達が出て来てくれる事を願っています。楽しく過ごせる時間が多く持てたらと思いつつ、また職場や協力工場等も少なく就労も思うようにならないのが現状です。

そして、一番心配なのが親亡き後のメンバーの生活です。やどかりの里は通所援産施設、援護寮や休憩利用、給食、電話相談などの各種サービスがあり、さらに６ケ所のグループホームと５ケ所の小規模作業所もあります。コンサートやバザーではマスコミの協力もあり、また地域の運動会やお祭りにも出かけたりしてすっかり地域に溶け込んでいます。私達も、障害を持つ人持たない人の分け隔てのない社会ができることを願い、グループホームなどの施設と地域作りに頑張っていこうと思います。

地域の活動から

共同作業所鳴和の里の改修（増床）について

鳴和の里　菩提寺　信　雄

当作業所が開設されたのは、平成５年４月で、当初家族会の思いは、とにかく作業所を作ろうという事で、当時のおおばこ会家族会長であった梅田さんから提供を受けた梅田ビル２階部分約80平方メートルの１室からの出発でした。この頃は、家族会員数も少なく通所者も７、８名程度で、さほど作業に不便を感じませんでした。

しかし、月日が経過するとともに金沢市内中心部に位置することもあってか、除々に通所者も17、８名程と増え、作業室も狭隘となって来ました。また、作業内容によっては区分する必要を感じておりました。

こうしたとき、指導員の間から隣室の倉庫を改修して、作業室にしたらどうだろうかと言う提案がなされましたが、これに要する財源は作業所も開所して間もない事でもあり、財政的にも、ゆとりがなく、家族の人達からの寄付についても、開所の際に寄付を募ったばかりで、これ以上の負担を掛けれないなどいろいろ財源確保に悩みがありました。

とにかく何時かはやらなければならない事でもあり、「時期を逸すれば何時になるか分からない」などの意見も出て、早速、運営委員会、理事会、家族会例会を開催し、予算案と事業計画案を提示しましたところ、賛否両論の意見も出ましたが、家族会臨時総会で改修工事の承認がなされ、先に提出してあった補助金の交付要望書に基づき県・市からの補助金の交付決定通知を受けて、改修工事を着工し、昨年10月末完成を見る事が出来ました。

今は作業スペースも二室で約190平方メートルと広くなり、家族会、通所者からも大変喜ばれております。最後になりましたが、この改修工事にあたって、ご支援下さった関係機関並びに各位に対して厚くお礼申し上げます。

「くろゆり会20周年記念式典」

くろゆり会

昭和48年９月に発会した小松保健所管内の精神障害者地域家族会「くろゆり会」が、20年の節目を祝って平成６年11月29日に記念式典を取りおこないました。

20年の間には会員数が伸び悩んだ時期や活動が停滞した時期もありましたが、現在は小松市と能美４町で会員数56名、毎月の例会と月１回発行の会報（くろゆり会だより）を活動の柱としています。又、フレンズくろゆり（旧名くろゆり作業所）とワークハウスつばさの２つの作業所の運営にも多くのエネルギーを使っています。

記念式典では北小松市長はじめ町の担当課長さん方、久木小松市議会副会長、額見小松市社会福祉協議会事務局長、加藤精神保健センター所長、林県連会長等々多くの来賓の方々にもお祝いにかけつけていただき、くろゆり会が多くの方々の援助をいただきながらここまで歩んで来られたことを改めて感じました。当日は、作業所有志のオープニングコーラスから始まり、ボランティアの元音楽の先生によるアコーディオンの演奏と歌、くろゆり作業所を支える会会員お２人による琴の合奏等バラエテイに富んだプログラムで、参加者の方々からは和やかで楽しい会だったと感想をいっていただきました。くろゆり会はこの20周年を節目に、今後も地域で精神障害とその家族の幸せを追求していくつもりです。

「ワークハウスつばさ」の開所

ワークハウスつばさ所長　中　田　なみ子

小松市内に２番目の小規模作業所として「ワークハウスつばさ」が平成６年４月に開所しました。開設準備の段階からメインの作業は自主製品でいこうという計画があり、いりがしの加工と販売を主な作業としています。いりがしの機械一式（80万円相当）も日本船舶振興会から地域ボランティア組織である「くろゆり作業所を支える会」への協力援助として受けた機材購入費で買うことができました。施設は期限付きではありますが、小松市から無料貸与を受けた建物を使っております。

自主製品として取り組めそうだからということでやりはじめたいりがし加工でしたが、思わぬメリットがいくつかありました。まずは加工の依頼者（市民の方々）が１日何人も作業所を訪ねてみえます。いつも人の出入りのある開放的な作業所になりました。そのためメンバーも接客の方法が自然と身に付いて来ます。また作業は機械を回して圧力の加減を見る、米を釜から出す、砂糖を煮る、まぜる、袋に詰める、袋にシールを貼る、等々けっこう体力と集中力を使う工程から、単純な工程まであって、メンバーのさまざまな力量に対応できる(メンバーの意見)作業です。販路の問題や品質の維持、新製品の開発等まだまだクリアしていかなければならない問題もありますが、この作業所がメンバーの夢の実現の足がかりになる場所であるよう努力していきたいと思っています。

心のふれあい講演会のご案内

石家連とむつみ会主催で「心のふれあい講演会」を下記のように開催します。珠洲は作業所づくりにがんばっています。多数の参加をお待ちしています。

テーマ「心病む人と共に生きる地域つくり」

講師　新潟県精神保健センター所長
後　藤　雅　博　先生

1.日時　平成７年３月10日（金）
午後12時30分～３時40分

2.場所　珠洲市農協会館
（珠洲市野々江町 240－１）

TEL　0768－82－2255（のと鉄道珠洲駅徒歩５分）

3.日程　12：30～13：00　受付、作品展示
13：00～13：30　開会式、作業所紹介
13：30～15：00　講演
15：00～15：40　作品展示、ビデオ上映

編集後記

阪神大震災で、兵庫県連、家族会、作業所に大きな被害が出ています。全家連で救援募金をしていますのでご協力ください。

［郵便振替講座番号・加入者名］
00150-5-406397 全家連兵庫地震義援金係）
（お申し込みは郵便局に備え付けの郵便振替用紙でお願いします。）